

高麗尹瓘九城考

—特に英雄二州の遺址に就て—(下)

稻葉岩吉

七

草黃嶺に關する私見を述べて見よう。草黃嶺なる名稱の史上に始見するのは、麗史である。乃ち恭愍王庚戌の春正月甲午、李太祖○成桂は騎兵五千歩兵一萬をもつて、東北面より黃草嶺を踰え、行くこと六百餘里、雪寒嶺に至る、又行くこと七百餘里にして、甲辰に鴨綠江を渡るとあるのが、それである。輿地勝覽(卷五五)には、江界都護府、山川の條、薛列罕嶺の下に注して、恭愍王以我太祖爲東北面元帥、擊東寧府○軒安以絶北元、太祖率騎兵五千歩兵一萬、自東北面踰草黃嶺、行六百餘里、至雪寒嶺、卽此嶺とあり、一は黃草嶺○一は草黃嶺○に作つてあるが、東國兵鑑(下)には、高麗取兀刺城と題して、太祖率騎兵五千歩兵一萬、自東北面、踰草黃・薛列罕二嶺云々とあるから、古は草黃とせられたであらう。それが、いつの間にか黃草に認められ、李氏太祖實錄の記事にも草黃に作らず、黃草に書かれてある。しかし、わたくしは、黃草をもつて、誤字でなければ、文人が徒らに典雅の名詞を擇んだまであり、正しくは、草黃となすべきであると思ふ。(尙ほ、今の太祖實錄は、東國兵鑑の後

に修正せられたものであることは、注意されたい。

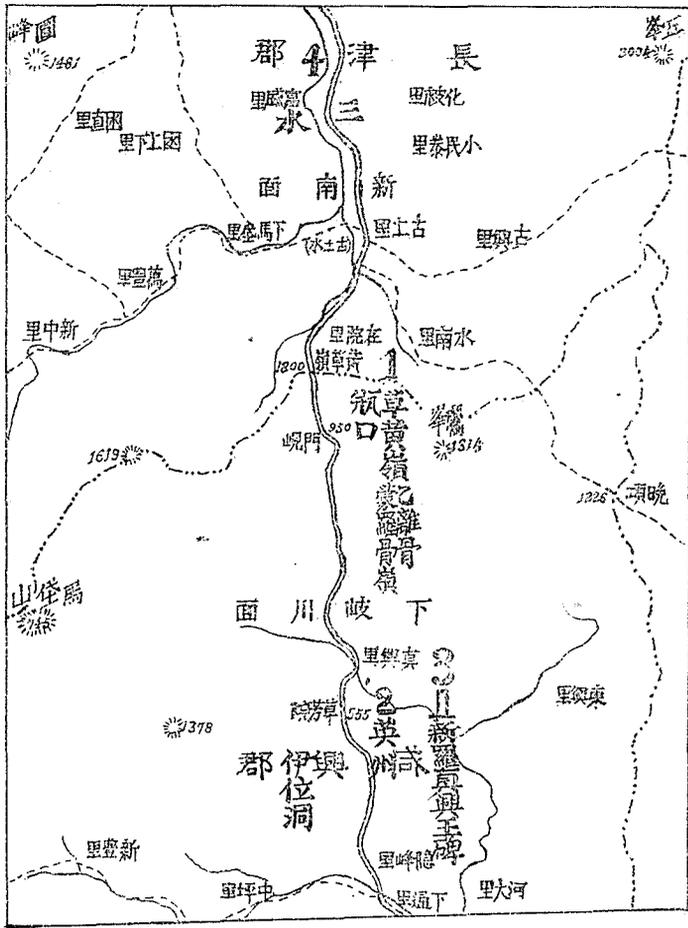
然るに、今一つ、わたくしのこの想像を確かめしむるものがある。それは、嶺[○]草の下、東方程遠からぬ地方に、草坊院と稱する村落が見出される。草坊の名は、大東輿圖にも載せてあるが、朗原君の金石清玩（第一）に、左の文字がある。

草坊院碑 三水

未及黃草嶺、有小嶺名草坊院、其上有新羅眞興王時所立碑、梁簡文帝時。

朗原君偏は仁祖朝に生存し、博采廣搜、遂に金石帖（朝鮮の）を集大成した、故に、今でこそ、眞興王北狩碑を呼ぶに、黃草嶺碑を以てするものゝ、古くは、草坊院碑（又は草房院碑）と稱したものである。院名のいつ頃まで溯り得るかは、立證し得ざるを遺憾とするが、李氏朝鮮以前に溯るものであることを信じたい。わたくしの考ふところでは、草黃を黃草に倒置したのは、草黃が、もと草坊（草房）より來たものといふことを理會せなかつたからである。蓋し坊（房）黃の二字は近似音であり、いつの間にか草黃に轉じ、さらに黃草と認められ、草坊（草房）とは、別名であるかに觀取せられた。草坊院あるが故に、その嶺名を得たか、將た嶺名よりして草坊院と稱せられたかは判らないけれども、勝覽などが、草黃に作れるに視て、そのいかに由來遠きかを想像し得る。

嶺の名稱に關する考證は、尙ほ不充分であると思ふが、わたくしは、この嶺の別名として、金史は



ひ、移鹿古といひ、高麗土語とは、認められず、むしろ之を女眞語彙に求めらるべきことは、容易に首肯されるのであるが、わたくしは、幸に、これら近似音として、韓兒和 (Kor-hun) の名稱を指摘

之を乙離骨嶺といひ、麗史は之を蒙羅骨嶺といつたことに注意されるのであり、それら二名の、同一音であることは、前に言ひ及んだ (松井氏の滿洲に於ける金の疆域参照)。金史地理志には、移鹿古水と稱する水名を、この地方に認むる、これ又同一音でなければならぬのである。さて、蒙羅骨といひ、乙離骨とい

したい（グルーベ Grube 氏女眞語言文字考の内七頁、花木門一一六）。幹兒和は、今の滿洲語にも Oruno として傳へられてゐることは、又グルーベ氏の言のごとし、ともに、草木の草を表はすところの女眞語言である。わたくしは信じたい、草黃嶺の名は、女眞語の幹兒和をもつて解すべきことを、然り而して、蒙羅骨といひ、乙離骨といひ、ともに幹兒和の對音でなければならぬのである。但だ兩名とも末尾に骨（忽）に相當する字音を示すより見れば、幹兒和の末尾音は、省略されて、骨コル即ち洞・坊などの意味を、同時表現したるものかも知れないが、もしそうとしたら、蒙羅骨・乙離骨は、ともに草坊の二字に適合する、草坊を、當時の女眞語より視れば、オル・ク・コル（wōl-oh-ko）と音じ得るのであらう。

然らば、伊位界上の伊位、もしくは伊位洞コルは如何、わたくしは、伊位をもつて、同じく幹兒和の省音となすことに躊躇せない。蓋し、鮮人が、胡（女眞）名をとり入れて之を國名化する場合、或は頭音を取り、或は末尾を取り、或は中音を省略することは、普通の習はしである。例へば、鐘城咸鏡北道の古名愁州は、伯顔バヤン愁所であり、穩城同は多溫平であり、會寧同は、阿木河・吾音會と稱せられ、鏡城は、もとは女眞語の木郎古（molangsu）と稱せられた。それら各の一二音を巧みに攝取して、現名に充當した。伊位の場合も、これに殊ならず幹兒和 wōl-i-huo は、やゝもすれば、wō-lu, wō-i に省略せられ、伊位イビに再轉した。蒙羅骨などいふ胡名を嫌ふところの高麗人として、むしろ伊位の文字を

ば愛用したに違ひない。以上の推定にもとづきて、伊位洞いゐどうをば、草坊と譯し、今の草坊院を、遠き高麗の遺蹟であると解することは、強ち無理ではあるまいとわたくしは思ふ。蒙羅骨（草嶺）山下の英州城址は、尙ほ不明である、恐くは、草坊院に遠からざる地方に見出されるであらうが、こゝに至りて、再び、兵馬鈐轄林彦の壁書は、思ひ出されるのである。壁書には、「勾高麗の古碑遺蹟存するあり」といつてゐる。いふところの古碑は、眞興王巡狩碑を指したのではあるまいか、光海君時代の記録を見ると、この碑を指して、聖徳王碑と稱してゐるほどであるから、兵馬倥偁の際ではあり、彦等は、その地が勾麗の舊土たりといふ觀念より、直ちに指して勾高麗の遺物といつたものであるかも知れない。碑は、もと嶺上○草嶺に在りしを現位置に移したものだといふ。眞興王の拓境のこゝに至れることは、果して偶然ではない、尹瓘戊子年の用兵は、かくして、前代新羅の迹を逐ふたといふことにもなる。今、幹兒和の對音を表出すること左のごとし。

幹兒和	wōi-hi-huō,
移鹿古	yi-lu(k)-k(h)u,
乙離骨	yih-i -kor,
蒙羅骨	ohi-lo -kor,
伊位洞	yi(f)-yi -kor,

右表中、「蒙」を[○]三と音じたのは、現代朝鮮の諺文に従つた。

八

戊子の春正月をもつて、尹璣は英州より中城大都督府[○]威に引き上げたことは、前に述べた。引上げたことの理由は、定めて戦局の展開に基因すべしとの私見であるが、それは、右軍方面の形勢であり中軍方面のことゝは解せられない。もとゝ、中右兩軍及び水師の記録は、太だ簡略に失してゐる。池内博士も、雄州の遺基を考へる上について、中右二軍の記事の簡略を指摘してゐられるが、今日まで、九城の、大概ね不明なることは、之が爲めに外ならないのである。しかし、中右二軍の記事の略に失したといふことは、一面より見れば、この方面には、敵の抵抗力寧ろ小であり、記録すべきほどの戦が行はれなかつたといふことに解せられるので、實に福州即ち吳林金村に建設せられた新城は、撤去の當日まで、たゞの一回も敵襲を受けてゐないのである。この點は、福州の位置を擬定する上に於て、重視されることゝ思ふ。わたくしは、尹璣用兵の全體について、下のごとく思考するのである。權は、その麾下の主力と左軍とをもつて、英州の草黃嶺方面に當り、中軍をもつて、瑚璉川より赴戰嶺方面を掃蕩せしめ、その右軍は、一路、咸關嶺に赴き嶺東にまで進出したのであるが、特に判らないのは、吳林金村の福州である。わたくしは、前節に於て、當時、敵の主力の那邊に在りしかを述べたことがある、乃ち主將石適歡は、今の三水方面に在りて、専ら、わが、草黃嶺より來る主力軍に

當つたらしいので、赴戦嶺方面は、未だ顧慮するに遑なかりしもの、加之、赴戦嶺は、草黄嶺に比して高峻であり、彼我ともに行軍は容易でない、これ即ち中軍方面に、さしたる戦を見ずにすんだものであらう。福州をもつて、この方面に擬定することは、必しも失當であるまい。たゞ吳林金村の位置は、それに類似の地名すら見當らないから、確認するに由がないのである。

雄州城は、福州に反して、女眞の襲撃を受け、之が包圍に陥ること數回、尹瓘の英州引上げ後は、この城が、専らその衝に當つたといふ形である。節要戊子二月の條に、

壬辰、女眞兵數萬、來圍雄州城、崔弘正、訓勵士卒、衆皆思鬪、即開四門、齊出、奮擊大敗之、俘斬八十級、獲兵車五十餘兩、中車二百兩、馬四十四匹、其餘兵仗不可勝記、時拓俊京在城中、州守謂之曰、城守日久、軍饗將盡、外援不至、公若不出城收兵、還救、城中士卒、恐無瞻類、俊京服士卒破衣、夜縋城而下、歸定州整兵、道通泰鎮、自也(雄)等浦至吉州、遇賊與戰、大敗之、城中人感泣。

とあり、同四月の條に

女眞設柵圍雄州城。……遣兵馬副元帥吳延寵授鉄鉞、往救雄州。

と見え、翌五月に

女眞攻雄州城凡二十七日、兵馬鈴轄林彥・都巡檢使崔弘正等、率諸將分兵固守、與戰日久、人馬困乏將潰、吳延寵使文冠・金陵・王字之等領精銳一萬分爲四道、水陸俱進、至烏首志・沙烏二嶺下、女眞先陣嶺頭、我兵爭登、急擊斬一

百九十一級、賊奔北、復欲結陣於平壤、官軍乘勝力戰、賊大破、遂燒柵而去、斬二百九十一級、延龍入城、以城中將士、不待援兵、輒出交戰、多被殺傷、罰之有差。

とある。以上の記事申にて、地點の明白なるものは、定州^{平定}及び通泰鎮位のもので、其他は、也等浦も、烏普志・沙烏の二嶺も、實は判らない。しかし、かういふことは、想像し得られるのである。雄州を圍んだ女眞兵は、數萬をもつて算へられ、わが救援また一萬に達すといふのであるから、雄州城は、彼我必争の形勝に置かれなければならない(一)、水陸俱進といひ、寧海軍とも稱せられてゐるから、沿海の地でなければならぬ(二)。咸州方面と雄州との間には、相扼すべき山嶺があり、それを越ゆれば、雄州附近の平野に出づる(三)。これだけのことは、會得され、それより以上は、各人の見解に任すより仕方のないやうであるが、池内博士は、まづ、雄州をもつて、退潮灣の城洞里山であると推定した。この推定は、九城は、咸興平野を環つて置かれなければならぬといふ博士独自の見解に基づき、第二の要項乃ち沿海地方であるといふことには、一致するが、第一第二兩項の要件には、全くあてはまらない。退潮灣は、今日でこそ鐵道沿線に近く、灣頭里許にして、山城は見出されるから、水陸の要害といふに適はしいけれども、高麗時代の大街道は、これら海岸線に由らず、咸興より徳山・林東諸院を経、咸關嶺にさしかゝり、咸原から、直に洪原に入るのである。而して、咸關嶺の北、二邦里餘には、車踰嶺があり、咸關嶺の傍徑といつてよい。わたくしの想像では、いふところ

の鳥音志・沙鳥の二嶺は、或は、威關・車踰の二嶺に比定すべきである。鳥音志は、もちろん女眞語で、兀里替（北方）に相當するかとも思はれ、沙鳥は、車踰の漢字音を寫したのかも知れないと思ふ。二嶺を越えて、直に平野に赴き得る地點は、洪原附近でなければ合致せない。いづれにせよ、退潮灣説は、その地が徒に沿海であるといふに止まりて、博士の所謂「大雄州」には、いかにも不似合である。

九

然るに、こゝに、高麗の李坦之墓誌といふものがある、毅宗壬申の歲に成り、今は李王職博物館の所藏に歸し、その文字は、總督府刊行の金石綜覽（上、三六三）にも收められてゐるが、雄州城に關しては、逸すべからざる好個の史料である。下の如し、

故登仕郎檢校大醫少監李君諱坦之、世爲益陽人、少習瀟湘法律、比壯頗曉醫藥、會中國名醫官、隨商舶至東土、主上下制、簡擇名家子、往習其術、公亦預其選、而深得其妙焉、（戊子）越著雍困敦歲、適有北狄、來侵境土、君孝延厚、以裨將轉戰却敵、入據雄州、城孤援絕、爲敵所圍歷二歲、堅守未降、道路否隔、無一介使來往其間者、公在京師、聞父被圍、羸糧涉道、抵定州鎮、見同包長迫、問父之安否、□□近有反間來言、天親染患幾亡者數日矣、吾欲往觀、恐豺狼之害、稽留至此、公聞語卽別、步憂元興鎮、○定平府南の土借乘轉輸舡、與百許人放榜、循花島、○咸興府の南戴星至泊那頭浦、下船入雄州城南門、見諸將問父所在、尋詣幕次……………七日、拾骸安函、背負將還、迨勁敵蟻附、攻陷

其城、乘勝突戰、无遁逃之地、抽身亡走、循江涯至桃林浦○都泣血誓天、得還京國、乃安葬于京城北（下略）。

以上の記事によるに、李坦之の父は延厚といひ、裨將をもつて、この役に従ひ、雄州城にて、敵に包圍せられた、坦之は、それに赴きて父を救援せんとしたが、不幸、父は城中に死し、坦之は、遺骨を拾得して歸京したといふ孝子傳にでも見られる物語であるが、幸ひに、この誌狀中、城の位置を想定すべき、多少のヒントは見出されるのである。坦之既に定州に至り、弟を見て雄州訪問の決意を爲し、州南三邦里ほどにある元興鎮にて、轉輸船に借乘し、百餘人の水夫と出發した。その海路をいへば、方向を花島に取り、戴星して那頭浦に至り、船を下つて雄州城の南門に入つたといふ。わたくしは、この誌文に接したとき、最初に氣づいたのは、外ならず、戴星の二字である、「戴星して那頭浦に至る」といふことは、日一日漕いでも到着せず、夜に入りて纔かに目的地に達したといふ意味であるから、坦之の上陸地點は、かなりの遠距離でなければならぬ、海上逆風に難じたといふ斷りは無く、まづ順風であると思はるゝが、もしそうとしたら、十數時間、相當速力にて駛走したに違ひない、いかに遅々としても、洪原海上には達したであらうと推測した。坦之既に那頭浦にて船を棄てたといふ、この那頭浦は、拓俊京の也等浦に一致し、海路よりして雄州に入るもの、必由地點であるらしいが、もしそうとしたら、乃ち雄州城の南門は、海波に洗はれてゐるのであつた。

然らば、雄州は、何處に求め得られるであらう。わたくしは、今の洪原をもつて、より多く諸條件

に合致すと考へるのである。洪原は、その海岸を距ること僅に里許、其一。咸興・咸關嶺より北關への大街道に置かれてある、其二。附近の西大川流域には、女眞の山城もあり、古墳群が散點する、其三。草黃・赴戰二嶺の通せざる場合、甲山方面の敵は、北青より洪原に出づる、其四。而かも偶然とはいへ、今の洪原の背景を爲すところの鶴山(大東輿圖)は、尹瓘がその始め築造したところの火串山に吻合するのである。乃ち、火串は *pu-ho-ot* と音すべく、女眞語の鶴(卜勒黑 *pu-leh-tai*) は之に相當するからである(グルーベ氏女眞語言文字考鳥獸門一八二參照)。朝鮮の諸書に、雄州洪原説はあるが、その根據は、わたくしには、不明である(後節參照)。

十

兵馬鈐轄林彦の英州南廳壁書に、「其地方三百里、東至于大海、西北介于蓋馬山、南接于長・定二州」とあり、九城の疆域は、この文によりて考定すべきことは、早く海東繹史の地理考によりて提唱せられてゐる。乃ち哲宗年代韓鎮書の説くところである。

謹按麗史九城初設之數、與撤還之數、名號不同、且公嶮鎮初不的指、今未可強解、唯林彦記可以取信、而既云地方不過三百里、則公嶮鎮亦當在咸興以北三百里之内也、且麗史吳延寵傳、女眞復圍吉州、城幾陷、王復遣延寵救之、行至公嶮鎮、賊遮路掩擊、我師大敗、散入諸城、此尤明公嶮鎮之在吉州以南也、謂在慶源等地者、甚誤。(海東繹史

續卷第十高麗一)

幾んど不易の定論であらう。尤も、これら里數に關することは、必しも準據となすに足らぬ。現に、睿宗の、尹瓘を慰諭した文字にも、身冒鋒鏑、深入賊壘、斬馘俘虜、不可勝計、而關百里之地、築九州之城云々とあるではないかと難する向きはないではないが、前にも引用せるごとく、九城撤去の理由の主なるものは「拓地大廣、九城相距遼遠、谿洞荒深、賊設伏抄掠往來者數矣」といふのである以上、三百里の數は、今のところ無條件に準據して然るべく、咸關嶺以東、磨雲嶺以南にその尖端を求めても、敢て支障は無い。曷懶甸（合懶路）と混稱する傾きあるも、一個の誤解である。曷懶路は、韓鎮書の所説の如く、咸興以北、端川・吉州等の地の總稱であり、金史地理志は、路下に夾注を施し、有移鹿古水、西北至上京一千八百里、東南至高麗界五百里としてゐるが、都連浦^{平定}より北行五百里にして、當に、利原・端川等の地に至るべければ、合懶總管府は、磨天嶺以南に在るべきであるとした鎮書の所見にも、わたくしは、全く賛同したい。たゞ、曷懶の名は、曷懶甸より發生せること疑ひなく、尙ほ恤品路が、綏芬河の河孟より發して、やがて路の總稱をなせるがごとし。故に、高麗築九城于曷懶甸との金史列傳の記事には、毫も顧慮するの要はない、同じき列傳には、單に曷懶といひ、甸の一字を加へざるものもある。たゞし、尹瓘當初の計畫の、曷懶甸なる草黃嶺を柱塞して、敵の來路を遮するに在り、主將石適歡は、主力を三水方面に置いたといふから、女真人側に映じた敵兵は、専ら曷懶甸（咸興平野）に在りとしたに違ひなからう。

文宗戊申六月壬寅の條を見るに、東女眞歸德將軍安矩等來朝と見え、同じく庚申の記事に、

東界兵馬使奏、判官任希悅・錄事鄭申・將軍戶興等、乘戰艦巡行椒島、遇賊船十艘、與戰敗之、獲七艘、俘斬多、王嘉之、賜希悅等便服一襲、金銀帶一腰、諸有戰功者、悉加爵賞。

とあり、同じく癸丑年六月丙申の記事に

兵馬使奏、東蕃海賊寇東京轄下波瀆部曲、奪掠民口、元興鎮都部署軍將、率戰艦數十艘、出椒島與戰斬十二級、奪俘十六人、王喜賜知兵馬事祕書監李成美・領軍都部署將廉漢等銀藥合各一事、其餘有功將吏職賞有差。

とある、いづれも、高麗海軍が、定平方面の海上に游弋して、南下の賊船乃ち女眞海賊を巡邏捕殺した際の記事であるが、わたくしは、これらの記事に對する毎に、髣髴ながらも、當時代の水師乃ち海軍のいかやうであるかを觀取するのである、而して、右の兩記事によるに、ともに、椒島を巡行して、敵船を搜索した、前記事には、出發點は示さず、後の記事には明かに、元興鎮といつてゐる。この椒島とはいづこであらう。勝覽には、この島名は、見當らないが、大東輿圖は、洪原近くの海上に川椒○前と記してゐるから、こゝにいふところの椒島は、同じくこの島嶼を指したものと思ふ。わたくしは、こゝに於てか、下のごとき想像を下したい。高麗水師は、陸上に比して、遙かに、進出してゐた、攻勢を示してゐる。高麗は、女眞海賊より受けたところの損害が、莫大であり、それに刺戟されて水師は編制されたのであらうが、その進出力に視れば、かなりの發達を示したものとといへる。高

麗の國境が、定平を一步も出づる能はざりし時にてすら、戰艦は、遠く椒島を巡行してゐた。尹璿の戊子年役の水軍は、全く記事を缺いてゐるから、輕々に判斷しかねるけれども、陸上援護の作戰は、効果を奏し、陸兵をして懸軍長驅せしめたに違ひない。高麗有屯于海島者、阿徒罕、率衆三十人、夜渡焚其營柵戰艦、大破之、遂下駝吉城、既而八城皆下。（金史列傳八十二）の記事に徴するも、海軍の行動は、略ぼ想像せられるであらう。駝吉城が、九城の吉州に相當すとの韓鎮書の意見は、考慮の値あるが、海軍の根據地たりし海島とこの城とは、地理的關係が密接であつたらしい。

十一

雄州は、既に咸關嶺を後にして、北進の路に求められたから、吉州や公嶮鎮の遺址は、論定さるべきであるが、今、提供されてゐる史料をもつてしては、徒に亡羊の歎を發するの外はない。咸鏡南北道は、歴史地理の啓蒙時代を脱出せず、現に、新羅の古碑は、磨雲嶺の一角に、突如、その雄姿を示したほどである。かくのごときは、全く前輩たちの夢想せざりしところ。一部の學人に疑惑の眼をふりむけられたところの草坊院碑さへ、今は、赫々たる光明を放つに至つた。わたくしは、吉州及び公嶮二城の位置について、臆説を有するけれども、それは後節に述ぶることとし、新史料の發現を期待することが、最も安全の方法であらうと思ふ。たゞしかし、從來の史論考察については、一二の批評を試むるの要がある。

尹瓊九城の役が、いよ／＼睿宗己丑年の撤去となりしより、恭愍王丙申元順帝至正十六年に至りて、天運は

循環し、そのかみ、蒙古の元に没せられた領域をも一舉回収した。乃ち同年秋七月乙酉の記事に、東

北面兵馬使柳仁雨、陷雙城興永總管趙小生・千戸卓都卿遁走、收復和登・定長・預高・文宜州及宣德・

元興仁耀・靜邊等鎮、咸州以北自高宗戊午没于元、今皆復之とあるのは、それに相當するが、咸州以

北の陷没は、睿宗以來のことで、高宗の時ではない。咸州は、和州雙城以北の訛りであらう。實に高宗

の戊午より算して九十九年、睿宗己丑よりして二百四十有七年、開城の高麗朝廷は、直ちに北京に上

表し、雙城興永三撒北は、もとこれ小邦の境土なりと聲明した。いふところによるに、先臣忠憲王宗高

戊午の年、趙小生・卓都卿等、わが罪を犯し、誅を懼れて、女眞を誘致し（實は蒙古を誘致した）わが

不慮に乗じて、わが官吏を殺し、雙城に據つて叛き去つたのであるが、今彼等二人は、逃竄してゐる

竊かに恐る、彼等が、再び事端を構へんことを。恭しく惟ふに、薄海内外、王土に非るなければ、尺

寸不毛の地は、朝廷の問題視せざるところである。伏して乞ふ、わが舊疆の雙城・三撒を還して、關

防を立て、一方、女眞の侵害を禁約せられたい云々と、この記事に照合さるゝものは、麗史地理志

（卷五十八）東界の條に、

（恭愍五年）
七月遣樞密院副使柳仁雨、攻双城、於是按地圖收復和登・定長・預高・文宜州寧仁・耀德・靜邊等諸鎮城。（下略）

とあるの一節である。この事件は、元亡びて明初に至り、所謂鐵嶺問題に關聯し、政府は、巧妙な

る外交辭令の下に遂に磨天嶺以南を略取したのであり、その主張には、幾多の權詞があるから、一史實をもつて批評すべき限りでないけれども、柳仁雨が地圖を按じて收復したといふことは、特別注意されると思ふ。睿宗以來いかに年代を経たからとはいへ、定州以北の、舊疆に非ることは、明白の事實であり、何等か根據するところがなければならぬ、もし強ひて舊疆といへば、尹瓘九城の役を指し、磨天嶺以南をもつて、之れが範圍であると解したに違ひなからう。わたくしは、柳仁雨の地圖なるものは、恭愍王時代の製作にあらずして、むしろ朝廷世傳の地圖が、新たに取り出されたものと解したのであるが、溯りて、高宗甲申春の條を檢するに、東眞國との間に、下のごとき問題があつた。

（正月）

戊申東眞國遣使賫牒二道來、其一曰蒙古成吉思、師老絕域、不知所存、訛赤忻貪暴不仁、已絕舊好、其一曰、本國於青州○三貴國於定州、各置權場、依前買賣。

の記事である。わたくしは、この記事を讀んだ際、何故に、蒲鮮萬奴の東眞國は、完州より青州に至る一帯を中立状態に置いたかを怪んだのである。乃ちこの間の道程は、定平界より北青界に至り、彼此二百里に垂んとし、中間、咸鏡第一の沃野を抱容する、萬奴の東眞は、何故に進んでこの沃土を略有し、定平關外に肉薄せなんだであらう。麗史のこの前後の記事は、極めて簡略であり、委曲を知るに苦むのであるけれども、若し推測を容すならば、金末の亂、曷懶路方面の統治弛潰せるに乗じて、

高麗は、之に進出の手段をめぐらし、こと、猶ほ元末のそれと同じく、東真國をもつて、對手となし、磨天嶺州^吉以南を回收して、尹瓘の昔に返さんとした。東真は、容易に之に應せず、青州の三撤にまで進出したから、相互の交渉は成立せず、所謂權場のことも、實現せなんだであらう。かやうに考へたいのである。もしも、この想像に幾分の理由ありとしたら、恭愍王時代のそれは、高宗甲申のそれをくり返したものでなければならぬ。わたくしは、吉州以下の九城を、磨天嶺以南に適宜分配した麗末鮮初の學者たちには、一一首肯せないけれども、昔の九城の界限及びその方向に關しては、大體に於て同意を與へなければならぬ。

十二

しかし、この範圍及び方向については、重大の危険を伴ふのである。私考では、公嶮鎮をもつて洪原東北の大門嶺に擬し、吉州は、之を利原附近に求むるのであるが、いづれにせよ、北青の南大川流域を除却するの憾みを免れない。北青を除外して、九城は、北進し得るであらうか、これが、わたくしの指して重大の危険を伴ふとする所以である。北青は咸興につぐところの沃土であるが上に、古より、女眞の根據地であつた。わたくしは北青城串山女眞字摩厓考釋の注に、文宗癸丑五月丁未西北面兵馬使の奏狀を引き、古の沃沮道は、北青より厚峙嶺方面に赴き、直ちに甲山三水に通ずるものと述べたことがある。右の條に、

(西女眞) 蕃帥又言三山村谷海邊分居蕃賊、殺掠往來人物、爲我仇讎、告諭化內三山村中尹夜西老等三十徒酋長、亦皆響應、

各率蕃軍、方將進討、請遣鄉人觀戰、於是遣定州郎將文選、及將校譯語等、著蕃服與那復其村都領霜昆下蕃軍同發

文選等馳報(洪原)骨面等村都領、各將兵到三山、阿方浦探候、賊穴凡三所、一爲由戰村、一爲海邊山頭、一爲羅場村、賊一

百五十戶、築石城於川邊、置老小男女財產于城中、以步騎五百餘人逆戰、云々。

とあり、三山村の三山は、參散に相當する。東眞の、この地を青州と呼んでゐるのは、三山の取譯であらう、(勝覽一五、青州牧屬縣の條、青州縣、在州東六十里、古薩買縣一云青川云々とあり、三山の三は薩に近いから、同じく青の義に取譯したらしい)。蓋し鳴綠江方面の女眞人は、北青の三山村を経由して、或は北し、或は南して開城へ朝貢したことは疑はれない。麗末よりの記録ではあるが、女眞の萬戶佟豆蘭帖木兒が、この地に盤据して李太祖を翼して、大業を成すに至らしめたことは著名であるが、これらの事實は、一として、北青が、傳統的に女眞の故地であつたといふことを語らないものがあるまい。わたくしは、今の九城を配置するに當りて、ひとり北青を遺却して、本高勾麗舊地、久爲女眞所據、高麗睿宗二年、遣尹璫逐女眞、證九城時、稱號未詳後沒于元、稱三撒、恭愍王五年、收復舊境、置安北千戶防護所、二十一年、改今名爲州云々とある勝覽の説明には、多少の意味が加へられる。たゞ草黃嶺方面の英州をば李朝太宗の四年を以て北青に配するなど、その根據は、全く判らない。

先春嶺の碑については、この民族の領土慾より生じたる一種の想像に過ぎず、前後の史實より見て

も架空であることは、韓鎮書の述ぶるところ、池内博士の所説の既に悉されるところである。尹瓘の記念碑が、端川の南、火項嶺の海に入る通路上に侍中臺あり、洪原の西大川上流、韃靼洞附近には、同じく北征の傳説があり、尙ほ北して鏡城に靖北祠があるなど、いづれも、尹瓘物語が、發展したものといつてよいであらう、(火項嶺の朝鮮音は Piu-tan であり、九城の吉州が置かれた弓漢村の女眞語 Han-tan に近似することは面白い)。但だ、わたくしは、先春嶺の立碑といふことについては、別に臆説がある。

いふまでもなく、睿宗朝の記事を検しても、尹瓘たちの傳記を検しても、先春嶺は見出されず、瓘は、公嶮鎮に碑を立て、界止を表したといふことのみである。しかし、この公嶮鎮とて、拓俊京が、吉州に赴くの際通過したといふのであるから、吉州以南に求むることが、史實に合するわけで界止ではない、麗末鮮初の學者が、かゝる見易いことを知らぬはずはあるまいが、恭讓王壬申春正月丁丑の記事に、兀良哈^{オランイ}及び幹都里^{オドドリ}來朝して、館舍を争つた際、幹朶里^{オドドリ}は、吾等之來、非爭長也、昔侍中尹瓘^(季成桂)、立碑曰高麗地境、令境内人民皆慕諸軍事威信而來耳といった。幹朶里は、この時、多分は、豆滿江外に、集落してゐたことと思ふ。幹朶里の言は、勿論迎合ではあるが、何分にも、九城役は年數を經、當時に傳へられるところは、立碑の事實のみであらうから、その事は、「われらの境土上」であるとしたかも知れない。果して、政府は、その言を利用して、所有速頻・失的覓・蒙骨・改陽・實隣・八

隣・安頓・押蘭・喜刺兀・兀里因・古里罕・魯別・兀的改の地面は、すべて本國公嶮鎮の境内であることの旨を李必等に榜示せしめた。もちろん、これは、政府の巧妙なる外交手段に外ならないのであり、李朝世宗の地理志に至りては、進んで右の立碑の地は、先春峴であると明記した。いよ／＼もつて、荒誕無稽の譏を免れないわけである。しかし、この立碑をば公嶮鎮と切截して考へて見ると、多少の縁因が認められると思ふ。それは、外ではない。尹瓘の莢州城に在りて、兵馬鈴轄林彦をして、その功業を題壁せしめた際、恐らくは、その方面に界石を樹てしめたであらう。それは、あり得ることである。然らば、どの方向に界石を置いたかといへば、いふまでもなく、草黃嶺方面でなければならぬのである。尹瓘の出征の目的が、草黃嶺を杜塞することであつたこと前に述べた。わたくしは、この攷察の下に、先春峴（嶺）の文字を眺めて見ると、何となく、僱春の二字が、むしろ、これに相當するのであるかを想はしむる。先春の二字は、もちろん當時の史乘に見るところないから、可い加減の撰定かに見ゆるけれども、しかし輕視することは、却て臆斷の譏を免れまい、池内博士の立碑に關する所見は、頗る精緻であるけれども、史料抹殺の遺憾がある。鮮初の人々は、女真人間を割合によく訪采したから、所謂尹瓘物語の間より、この二字音を拾得しそれを先春としたものではあるまいかと思ふ。僱春が、今の三水方面の地域を稱したことは、前に述ぶる如くである。

咸・英・雄・福・吉五州公嶮鎮の外、他の三鎮には、異論を見出さぬから、こゝに言及せない。（完）

此小考を草して後ち、津田左右吉博士の舊稿尹權征略地域考(朝鮮歴史地理)を閲みして、種々のヒントを得た。わたくしが、伊位の瓶頂を、草嶺上に求めたるに對して、津田博士も、略ぼ同様の見解である、乃ち「赴戦嶺又は草嶺の一徑路」か、むしろ「黃草嶺とせん方妥かなり」といひ、雄州吉州等を、それ〴〵咸關嶺以外に求められてゐる。地點こそ一致を得ないが、大體に於ては博士の想像を是認したのである。たゞ、三漚水を北青に求められたるに對しては、全然賛同することが出来ない、乙離骨を過ぎりて、三漚水に至るのである以上、之を北青に求めることは、方向違ひであらう。——昭和五ノ一ノ四——

高麗尹權九城考正誤

頁	行數	誤	正
二	十三行	尹權	尹權。
同	十五行	輿地勝覽	輿地勝覽。
三	八行	女眞用	女眞用兵。
四	十五行	國練使	國練使。
五	七行	十四國練	十四國練。
同	九行	餘無所問	餘無所問。
七	三行	日吳事急	日吳事急。
同	五行	管俊京	賞俊京。
八	五行	義祺	義旗。
一四	一行	清諸公登城	請諸公登城。
一五	一行	然當當戰守	然當戰守。
同	四行	尹權義略	尹權の戦略。

- 一六 六行 首の咸州
 - 同 十一行 興地勝覽
 - 同 十四行 大東輿圖
 - 一七 十一行 首たる
 - 一八 十三行 星題水
 - 同 十四行 星題水
 - 一九 十二行 五老里。博士の擬定したる英州
 - 一九 十五行 それは、五老
 - 二〇 四行 又立碑于公險鎮以百界止
 - 同 八行 五老里英州説より
-
- 首城の咸州
 - 興地勝覽
 - 大東輿圖
 - 骨たる
 - 星顯水
 - 星顯水
 - 五老里。博士の擬定したる眞陽鎮址
 - それは、東興
 - 又立碑于公險鎮以爲界止
 - 東興里英州説より